

平成 25 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2013年4月～2014年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただきますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 宮城県大崎市立古川北中学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中等教育学校
 教員養成 技術/職業教育
 その他 ()

住所 〒989-6252
宮城県大崎市古川荒谷字権現山5番地

E-mail : osaki_fk-jh@educ.osaki.miyagi.jp
 Website : _____

児童生徒数：男子 160名 女子 119名 合計 279
 名

児童・生徒の年齢 12歳～15歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか (福祉)

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

※当報告書についてはユネスコスクールホームページに掲載するため、活動内容につ

いては、添付資料ではなく本報告書にご記入願います。

活動1 3年被災地（石巻）ボランティア活動 2013年7月12日実施

1 目的

- ・内陸部に位置する本校生徒に、沿岸部における被災の現状と災害に対する正しい理解を促す。
- ・被災地の方々への支援活動を通して、社会の一員としての自覚と奉仕の精神を養う。

2 事前指導

① 映画「3. 11を生きて」の鑑賞（3学年） 6月21日実施

長編の映画の一部を生徒に見せ、沿岸部で津波により何が起きてどうなったのかを理解させた。本映画は、門脇小学校児童や保護者、地域民の証言を取り上げており、生徒は生々しい映像を目にする事はないが、そこで何が起きたのかを証言から理解する事ができた。また、過去にテレビなどで映し出された映像を想起した生徒もいた。さらに、内陸部とは違う状況を把握する事もできた。

② 石巻自主避難所「明友館」元リーダー千葉恵弘氏講演会（1, 3学年） 7月 8日実施

石巻で自主避難所を運営した「明友館」元リーダーから「奇跡の避難所」と呼ばれた「明友館」での活動の様子や生活の様子、困った事、悩んだ事などを詳細に話してもらった。さらに、なぜ避難所を運営する事になったか、避難していた人たちは今どうなっているのか、被災地を訪れたら見てほしい事などについて話があった。



③ 被災地へ提供する雑巾の手作り作業（3学年）6月26日～7月10日 仮設住宅に住む人に提供する雑巾を、3学年生徒一人一人が、各自タオルを持参し、縫った。講演をした千葉さんの話から消耗品が不足しているとの情報を得て全員で準備できる雑巾を縫う事にした。

3 実践活動 被災地（石巻市）訪問（3学年） 7月12日実施

<活動1> 被災地見学

午前中に石巻市内の被害の状況をバスの車窓から眺め、その後、門脇小学校跡地を訪れ、東日本大震災当日に門脇小学校の児童が日和山公園に避難した道路を辿った。



<活動2> ボランティア活動

新栄一丁目仮設住宅の草むしり、窓拭き清掃を全員で実施した。



<活動3> 支援活動

ボランティア活動終了後、3年生全員が事前に作った雑巾を仮設住宅の方々に寄贈した。最後に東日本大震災で家族や親戚などを亡くされた方々及び家屋や仕事を失った方々に、元気を取り戻していただくため本校教員がつくった合唱曲である「心ひとつに」を参加者全員で合唱した。



- 4 事後指導 被災地ボランティアのまとめ（3学年） 7月17日実施
作文「被災地ボランティアを通して」を書かせる事によりまとめをさせた。

先週の7月12日には石巻に行き、被災地ボランティア活動を行いました。仮設住宅の除草作業や窓ふき、空き缶拾いでは、3年生全員が一生懸命取り組みました。仮設住宅の方に、手作りの雑巾を受け取ってもらいました。「ありがとう」と何回も言われ、ボランティア活動をしてよかったと改めて思いました。普通に生活できる私達はすごく幸せだと感じました。

活動2 1年被災地（石巻）支援活動

2013年12月17日実施

1 目的

- ・沿岸部における被災後の現状に対する正しい理解を促す。
- ・被災地の方々への支援活動を通して社会の一員としての自覚と奉仕の精神を養う。
- ・被災地の方々とのふれあいを通して、人の痛みやあたたかさを感じる心を養う。

2 事前指導

- ① 募金活動（1学年） 10月19日実施
1学年で被災地支援活動を実施するにあたり、文化祭で被災地に贈るトイレトーパー購入代金の募金を、1学年生徒が保護者、生徒に呼びかけた。



- ② 映画「3. 11を生きる」の鑑賞（1学年） 12月3日実施
1年生も震災ボランティアを実施するために、3年生同様映画を視聴した。

- ③ 手遊び歌リーダー研修（1学年）
12月10日・11日実施
1学年が被災地ボランティアで訪問する保育所で園児と交流をもつため、近くの保育所を訪ねて手遊び歌の研修をリーダー12名が受けてきた。



- ④ 手遊び歌研修（1学年） 12月12日実施
リーダー研修でお世話になった近くの保育所から保育士5名にお出でいただき、研修を受けたリーダーの生徒と一緒に手遊び歌を1年生全員ができるよう研修を行った。



- 3 実践活動 被災地支援活動（1学年） 12月17日実施
2グループに分かれ、1グループは被災地見学、被災した方との交流、保育所訪問、2グループは保育所訪問、被災地見学、被災した方との交流を行った。

<活動1> 幼稚園・保育所訪問

幼稚園・保育所訪問では、園児と手遊び歌を通して交流を図った。募金で購入したトイレトーパーを寄贈してきた。



<活動2> 被災地見学

午前中に石巻市内の被害の状況をバスの車窓から眺め、その後、門脇小学校跡地を訪れ、東日本大震災当日に門脇小学校の児童が日和山公園に避難した道路を辿った。



<活動3> 被災地の方々の話を聴く会

被災した方との交流会は仮設住宅の集会所にて、仮設住宅に住んでいる方14名と生徒がグループを作り、当時の状況や今の生活についての話を聞いた。ここでも募金で購入したトイレトペーパーを寄贈してきた。



4 事後指導

- ① 被災地ボランティアのまとめ（1学年） 12月17日実施
被災地訪問からの帰校後すぐに、作文を書かせまとめを行った。

<生徒の感想>

○門脇小学校では、焼けこげた校舎が残っていて少しこわくなりました。山の方から見ると、ガラスが割れていて、2・3階はほぼすべてが黒くなっていて、ビデオで見るのと実際に見るのでは全く違うような感じで、実際に見た方がこわかったです。

○僕が最初バスの中から外を見ると、そこには何もありませんでした。津波でやられたんだなとすぐ分かりました。保育園に行くまで建物は少ししかなかったように感じます。でも保育園に着いたとき、園児達が元気よく遊んでくれて、僕の方が元気づけられました。午後は被災地の方々の話を聴く会でした。震災の時のことをすべて話してくれました。本当は思い出したくないけれども、僕たちに精一杯話してくれました。最後に「一人一人助け合いなさい」と言われました。この言葉を忘れないよう、生活の中で頑張っていきたいです。

- ② 手遊び歌指導者への礼状作成（1学年） 12月19日実施
手遊び歌を指導していただいた保育所の皆さんに、リーダー12名が礼状を書いた。
- ③ 交流会参加者への礼状作成（1学年） 1月15日実施

仮設住宅に住み、話を聴く会の際にお話をしていただいた方に、御礼の手紙を書かせ、まとめを行った。

<生徒の手紙>

拝啓 寒い日が続いていて、雪が降っておりますが、そちらも雪は降っていますでしょうか。

12月に石巻に行ったとき、たくさんのことを学ばせて頂きました。泣きながらお話をしてくれた方もいました。震災の時のことを思い出させてしまい、もうしわけないと思います。しかし、泣いてくれた方々の涙は決して無駄ではないです。私達はその涙のおかげで震災のつらさや残酷さなどが分かりました。つらい思いをして生きている方、あるいは前向きに生きている方など、いろんな方々がいらっしゃいますが、私は生きていることを幸せに思い、命を大切に生きていこうと思います。ご健康を祈ります。

敬具

活動の成果とESDとの関係

1 事前指導より

① 映画の鑑賞

- ・映画は一部抜粋して鑑賞した。津波の映像が出てくるわけではないが、様々な人の証言を聞く事により何が起きどのように行動して命を守る事ができたのかを理解する上で有効な方法であった。
- ・内陸部で被害を受けた自分たちと津波の被害を受けた方々との違いを理解する上で有効であった。
- ・実際に車窓から被害を見せる前に、映像で津波の被害を受けた学校の様子を見せる事によって、生徒が受けるショックを和らげる効果があった。
- ・生き残った人々の証言から、これから自分たちが何をなすべきかを考えたり、どのように生きていったらよいかを考えたりする貴重な機会となった。

② 避難所運営者の講演会

- ・避難所とはどのようなところか、どのような活動がなされたのかを理解するのに大変有効であった。
- ・避難所でのルールから、人間として現代社会を生きていく上で大切な事は何かを考えるきっかけとなった。
- ・避難所で生活していた人たちが、その後どのようになったのか話を聞く事により理解を深める事ができた。
- ・被災地に求められている事は何なのか、同じ県民としてどうあるべきなのかを考えるきっかけとなった。
- ・仮設住宅で生活する人々が何に困っているのかを想像する良い機会となった。

③ 雑巾づくり、募金活動、手遊び歌研修

- ・雑巾づくりについては、仮設住宅で生活する方が使うという事をしっかりと理解し、3年生の生徒一人一人が手縫いでつくり上げた。
- ・募金活動は1年生の自発的活動であり、文化祭で生徒が趣旨を発表しお出でになった方々から沢山の寄付をいただいた。
- ・手遊び歌研修は、訪問する保育所で幼児との交流をどう進めたらよいか、近くの保育所に相談した事から実現した研修である。初めはとまどいも見られたが、研修の時間が進む内に、自分たちも楽しむ様子が見られるようになった。
- ・これらの活動は、他者との関わりを考えた場合、異年齢の人との交流を深めるきっかけとなった。また、他者が何を求めているのかを考えるよいきっかけとなった。

2 実践授業より

① 3学年による被災地訪問

・門脇小学校跡地を訪れて、東日本大震災当日に児童が避難した道路を歩かせたが、児童たちがどんな思いで避難したのかを想像するには非常に有効であった。また、シートがかけられ廃墟のようになった門脇小跡地を実際に見て、津波の被害の大きさを理解する事ができたようである。

・仮設住宅での除草作業や窓拭き、空き缶拾い等は、津波の被害を目の当たりにした事及び仮設住宅に住む方の苦勞を事前に講演にて聞いていた事もあり、生徒全員が意欲的に行い、仮設住宅に住む方々のために頑張ろうという気持ちが伝わってきた。

・仮設住宅の方々に、手作りの雑巾を寄贈したり、震災を受け本校教員が作詞作曲した混声合唱曲「心ひとつに」を生徒全員で披露したりすることで、困っている人や弱者へ手をさしのべる事の大切さを学ぶ良い機会となった。

・仮設住宅に生活する人たちの行く末について心配すると共に、同じ県内に生活する者として、今後何ができるのかを考える良い機会となった。

・石巻市内をバスの車窓から見学した事により、この町の今後の発展について気にかける事ができるようになったと考える。また、10年後、20年後といった将来の姿についてのニュース等に関心を示す生徒が増えた。



② 1学年による被災地訪問

・被災した地域の保育所を訪問したのは、被災しながらも元気に生活している幼児にさらに元気を与えたいという目的があったが、逆に幼児たちから元気をもらう事ができた。厳しい中で生活していても明るく元気に生活する幼児の姿から新しい担い手の予感を感じ取る事ができた

・被災した方々との交流会では、心に傷が残る中、必死に震災直後の話をされた方々に対し、尊敬の念やたくましさ、ありがたさなどを感じると共にその方々の心情の一部でも理解する事ができた交流であった。

・異年齢の人たちとの交流は、生徒一人一人の考え方や生き方に大きな影響を与えたものとする。今後、1年生は地域の担い手作りの学習を防災・福祉の分野で進めていくが、その中に生かされるものとする。また、2年生で実施する「立志式」での生き方発表にも大きな影響を与えるものとする。

・3年生による被災地訪問を受け、1年生では人との関わりに焦点を当てて実施した。今後、防災・福祉学習を進め、3年生で再度被災地を訪問する予定である。生徒も再度訪問したいという気持ちがある。



3 事後指導より

① 3年生の作文

・ 内陸部に生活するため、これまでどこか別の地域の話ではないかと思っていた津波被害を、実際に目にする事により内陸部で何不自由なく生活している自分たちと比較し、複雑な思いをした生徒もいた。しかし、そのほとんどの生徒は同じ県内の人間として、何とか被災地の方の力になりたいと考えるように変容してきた。この気持ちを大切に育てていきたいと考える。

・ ボランティア活動を通し、このような活動を継続して行いたいという生徒が出てきた。

② 1年生礼状作成より

・ 仮設住宅に生活し、交流会に参加いただいた方への礼状は、生徒それぞれが感ずるところを短い文章だが的確にまとめる事ができた。

・ これらの取組の後に、防災の授業を継続して行っているが、この交流は参考になる事や防災に対する意識付けにもなっており、生徒が意欲的にまじめに授業に取り組むなど変容が大いに見られた。

4 全体の指導を通して

・ 本校では、今年度から本格的に防災教育に力を入れて指導に当たっている。その中に、「福祉」に関わる事も取り入れ模索しながら指導に当たっているところである。

防災に福祉を絡めたのは次のような理由がある。

<理由1>

大きく被災した石巻もそうだが、生徒の生活する町も高齢化がすすみ、このまま放っておくと復興に気の遠くなるような時間がかかったり、コミュニティとして成り立たなかったりする可能性がある。高齢化をしっかりと受け止めて、今後地域作りをしていかなければならない共通の課題がある。

そのため、高齢化も意識した取組になるようにしたいと考えた。

<理由2>

中学生は、地域の中で生活している割には、なかなか地域の一員としての役割は与えられていない。しかし、様々な体験を行うと、大人以上に機動力を発揮したり、行動力を発揮をしたりできる事が分かっている。地域の一員としての役割を割り当てられればそれなりに力が発揮できるものとする。今後、地域との交流を進めていけば、共助の部分で、中学生の役割が明確になるにつれ、自然と防災だけでなく、福祉も関係してくる考えた。

<理由3>

一連の被災地ボランティア活動を実施する事により、防災教育の必要性や復興に向けた取組の大切さをほとんどの生徒は感じるはずである。学校や地域の中で具体的な防災について学習したり、復興に向け何ができるか考えたりする上で、防災だけではなく福祉についても学習した方が生徒の活躍の場が広がると考えた。

・ 防災教育の中に福祉を取り入れ、今年度から全学年が何かかにかの授業実践を行っている。その中で防災教育を震災ボランティアと結びつける事、地域の防災組織と結びつける事の二つを考えながら実践している。そのことが、ESDと大きく関わってくるものとする。社会が疲弊する状況になる前に若い人たちの力で地域を盛り上げていければと考えている。

- 現在、震災ボランティア後に次のような活動を行っている。
- <1学年> 自助をテーマに地域の皆さんの力をお借りして次のような活動を行っている。
- ・サバ飯づくり(準備活動9月11日実施写真左、フィールドワーク9月20日実施写真右)

- ・通学路安全マップづくり(フィールドワーク2月14日、まとめ作業2月26日実施下写真)



- ・学区内にダムができた理由の学習(1・2年合同講話2月7日実施)
- ・学区内における東日本大震災の状況を知る学習(1・2年合同講話2月7日実施)



- <2学年> 共助をテーマに地域の皆さんの力をお借りして次のような活動を行っている。

- ・学区内にダムができた理由の学習(1・2年合同講話2月7日実施)
- ・学区内における東日本大震災の状況を知る学習(1・2年合同講話2月7日実施)
- ・自分の住んでいる地域内で東日本大震災のときに地域住民はどのような状況であったか調べる(区長宅訪問2月14日実施:フィールドワーク)



3学年については、今年度震災ボランティアのみの実施であったが次年度以降内容を検討しながら進めていく。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（）